Telling Stories, Breaking Stereotypes: Gender, Age and Race in Laura Liverani's Photograph



イベント報告

写真で偏見を壊す: ラウラ・リヴェラーニの写真が 語るジェンダー、老い、人種

> コーディネーター: レティツィア・グアリーニ (CGS研究所助教)

2021年1月29日に国際基督教大学ジェンダー研究センターは、写真家のラウラ・リヴェラー二氏をお招きし、ウェビナーを開催した。本イベントでは、リヴェラー二氏が自身の作品におけるジェンダー、老い、人種について語った。本イベントは2020年4月に対面イベントとして企画されていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となり、最終的にオンラインでウェビナーとして開催された。そのため日本のみならず、さまざまな国から120人以上の参加者が集まった。

リヴェラーニ氏は、ボローニャ大学の芸術メディア修士課程を経て、ロンドンのウェストミンスター大学の写真科修士課程を修了した。現在イタリア・国立デザイン大学ISIAで教えながら、アジアとヨーロッパを中心に写真家と講師として活動している。彼女の作品は、『The Guardian』、『The Washington Post』、『Marie Claire』などに掲載されている。また、イタリアの雑誌『The Passenger - Giappone』(Iperborea, 2018年。英語版は、2020年にEuropa editions より出版された)で日本に関する特集号の全写真コンテンツをキュレーションした。シンガポール国際写真フェスティバル(2014年)やローディの写真フェスティバル(2016年)などに参加する他、2015年に長期にわたって手がけているプロジェクト『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・アイヌ』がヴォリーノ賞を受賞した。

リヴェラーニ氏の作品は、高齢のチアリーダー、シニアモデル、女性力士、北 海道の先住民族アイヌなどのテーマを描いている。彼女の写真は、現代日本のあ まり知られていない共同体を中心に、コミュニティのリーダー、アーティスト、 そして何よりも普通の人々といった個人の物語にスポットを当てている。同時に 彼女の作品は、ジェンダー、人種、民族、年齢の交錯に取り組むことで、日本に 関する固定観念を覆すものでもあるといえよう。

本イベントでは、リヴェラーニ氏はまず自分の写真の背景にある考え方につい て述べた。つまり、人々が集まり、絆を作り、帰属意識を共有することに惹かれ 写真を取る傾向があると説明した。そして、何がその人たちを結びつけたのかを 探り、写真を通してその人の個人的・社会的アイデンティティを浮き彫りにする ことに興味があると強調した。

リヴェラーニ氏の作品の多くは、ポートレート写真である。彼女は、ポート レートをカメラを介した撮影者と被撮影者の相互作用として捉えていると説明し た。この関係は写真撮影の前に始まり、その後も続くことが多い。また、リヴェ ラーニ氏は、写真を撮る側と撮られる側の間に非対称関係ができてしまう問題が あると述べた。そのような非対称性を避けるために、写真家と被写体とのコラボ レーションから生まれるものとしてポートレートにアプローチを試みていると主 張した。

このようなアプローチを具体的に説明するために、リヴェラーニ氏はさまざ まな写真プロジェクトを紹介した。まず『Family Book』(2018年~現在)では、 家族という概念に取り組んできた。本プロジェクトでは、リヴェラーニ氏は、 LGBTの家族、高齢者の家族、娘や息子と暮らす親、一人親家庭など、できるだ け多くの家族構成を含むさまざまな家族の写真を撮影してきた。撮影の際に被写 体に協力してもらいながらヴァナキュラーフォトスタジオの設定を再現した。ま た、被写体の家族の写真アルバムの写真を撮らせてもらうことで、写真家と被写 体とのコラボレーションを行ってきた。

『Japan Pom Pom』(2014年) は、1996年に滝野文恵によって結成された 「ジャパンポンポン」というシニアチアリーディングチームに焦点を当てたプロ ジェクトである。「ジャパンポンポン」は、高齢女性に対する意識を改めること を目的にしているが、このプロジェクトを通じて型にはまっていない高齢者の表 現を探ったと、リヴェラーニ氏は説明した。さらに、このシニアチアリーディン グチームが、老いのステレオタイプに挑む一方で、ジェンダーのステレオタイプ

を強化する点に魅力を感じたと述べた。『Japan Pom Pom』においても、リヴェ ラーニ氏はポートレートという手法を選びながら、滝野文恵らのステージ上のペ ルソナを強調し、ステージ上でパフォーマンスをしているように被写体を扱った と説明した。

『Sugamo Beauty School』(2018年) は、おばあちゃんの原宿として知られる 巣鴨と、シニアモデルの学校をテーマにした写真プロジェクトである。もともと リヴェラーニ氏はストリートファッションを撮りたかったが、人目を気にする高 齢の女性や男性の抵抗に遭ったと説明した。そんななか、彼女は、巣鴨にある素 人の高齢者モデルを養成する美容専門学校を見つけた。そして、彼女らが選んだ 服を着ている写真を撮り、また巣鴨で売られているファッションアイテムの写真 も加えた。

『Women Sumo』(2018年)は、アマチュア力士として活躍している女性に焦 点を絞ったプロジェクトである。女性は相撲の興行に出場できず、土俵に上がる ことさえ禁じられている。リヴェラーニ氏は、女性が土俵の上に立ち、通常は男 性しか入れない場所に女性として入る権利を主張するために、土俵上の女性を撮 影したと説明した。ポートレートの手法をもって女性力士たちの顔も撮ったが、 彼女たちに好きな相撲の技を見せてもらうように依頼しその瞬間をも収めた。こ のプロジェクトで撮影された女性の一人は、シドニーに開かれたリヴェラーニ氏 の展覧会『Coexistences: Portraits of Today's Japan』に招かれ、女子相撲の経験 について講演を行った。リヴェラーニ氏が説明したように、ドキュメンタリー写 真は、写真を撮って誰かを表象するという行為を超え、交流の場を作ることがで きるのである。

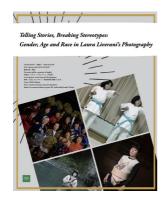
最後にリヴァーニ氏が『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・アイヌ』に ついて語った。なぜ海外でも日本でも北海道の先住民族であるアイヌについてあ まり知られていないのか。博物館や書籍だけでなく、異なる方法でアイヌの人々 と出会い、リアルに関わることができるのか。これらの疑問が写真プロジェクト 『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・アイヌ』(2012-2016年)の背景にあっ たと、リヴェラーニ氏は話した。このプロジェクトにおいても被写体に撮影場所 や着たいものを選んでもらいながら共同制作によるポートレートというアプロー チを試みた。

アイヌのコミュニティを撮影しているうちに、このプロジェクトを拡大する必 要性を感じたと、リヴェラー二氏は語った。そこで、コミュニティと関わり、彼 ら彼女らの物語を共有し、アイヌについてもっと知るためにドキュメンタリー映 画を撮影することを思いついたと説明した。こうしてリヴェラーニ氏は、監督空 音央氏とプロデューサーのヴァリー・トルステインドッティ氏とチームを組み、 映画『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・アイヌ』(2019年)が誕生したの である。リヴェラーニ氏たちはドキュメンタリーの舞台として北海道の二風谷を 選んだ。というのも、アイヌについて幅広く執筆したイタリアの人類学者フォス コ・マライーニが長くいた場所だからだ。

『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・アイヌ』 は、リヴェラーニ氏たちが 二風谷で出会ったアイヌの人々の物語を集めている。映画の語り手は、リヴェ ラーニ氏たちと初めて会ったとき15歳だった関根摩耶である。前述した展覧会 『Coexistences: Portraits of Today's Japan』に関根氏も招かれ、自身のアイヌと してのアイデンティティについて講演を行った。今回のCGSイベントにもゲス トスピーカーとして参加した。

関根氏がアイヌ語で簡単な自己紹介をした後、アイヌの言葉や文化について学 びつつ、アイヌ文化をもっと知ってもらうために活躍していると語った。また、 リヴェラーニ氏や空音央氏との出会いについても話した。関根氏がもともと写真 やインタビューの被写体として「利用される」ことに抵抗があったが、リヴェ ラーニ氏と空音央氏は彼女の家族やコミュニティの一員となったと主張した。そ のため、『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・アイヌ』が外部の人間が作っ たものではなく、家族が家族のために撮った記録であると、関根氏は説明した。 さらに、リヴェラーニ氏と空音央氏との出会いによって、関根氏は写真や映像に 撮られることがアイヌである自分を表現する方法であると理解するようになった と述べた。

リヴェラーニ氏の講演の後、映画『Ainu Neno An Ainu アイヌ・ネノアン・ アイヌ』の上映会と質疑応答が行われた。そこで植民地や多数派の権力によって 禁止された独自の言語や習慣を守る苦労や、写真の中の見る側と見られる側の非 対称な力関係について話し合う機会が設けられた。



Event Report

Telling Stories, Breaking Stereotypes: Gender, Age and Race in Laura Liverani's Photography

Coordinator: Letizia GUARINI

(Assistant Professor, CGS)

On January 29th, 2021, the Center for Gender Studies (CGS) welcomed photographer Laura Liverani to an online open lecture, with a focus on gender, age, and race. This event, which was originally scheduled as a face-to-face lecture to be held at International Christian University in April 2020, was postponed due to the COVID-19 crisis and eventually became an online gathering that brought together more than 120 people from different places and different time zones.

Laura Liverani is a documentary photographer and lecturer based between Japan and Italy. She holds an M.A. in Arts and Media at the University of Bologna and in Photographic Studies at the University of Westminster, London, and teaches photography at ISIA in Faenza, Italy. Her works have been published in *The Guardian*, *The Washington Post*, and *Marie Claire*, among others, and she has curated all the photographic contents of the Italian magazine *The Passenger Giappone* (Iperborea, 2018; the English edition was published by Europa editions in 2020). She participated in several group exhibitions and festivals, including the Singapore International Photography Festival in 2014 and the Festival of Ethical Photography Lodi, Italy in 2016. In 2015, she was awarded the Premio Voglino Award for Best Portfolio for her project *Ainu Neno An Ainu*.

Laura Liverani has portrayed elderly cheerleaders, senior models, women sumo wrestlers, and Hokkaido's indigenous Ainu population. Her photography focuses on lesser-known communities of today's Japan and highlights the stories of individuals: community leaders, artists, and above all ordinary people. At the same time, her works challenge stereotypical representations of Japan, as they engage with the intersections of gender, race, ethnicity, and age.

At the beginning of her talk, Liverani explained how she tends to photograph individuals who get together, form bonds, and share a sense of belonging. She emphasized that she is interested in exploring what brought together these people and highlighting their personal and social identity through her photography.

Most of Liverani's works are photographic portraits. In her lecture, Liverani explained that she intends the portrait as an interaction between the photographer and the subject mediated by the camera. This relationship starts before the photo session and often continues after that. Liverani also stressed that while the relationship between the photographer and the subject can be problematic in that it is not symmetrical, at the center of her portrait photography there is the idea of a collaboration between herself and the subjects of her photos. She then introduced several of her photographic projects to prove this point.

In Family Book (2018-ongoing), Liverani has been working on the idea of family. She has taken photographs of various families, including as many family configurations as possible: LGBT families, elderly families, parents living with their daughters or sons, single parents, etc. She has been collaborating with the subjects of her photographs by asking them to help her reproduce the setting of a vernacular photo studio and share photos from their own family photo albums.

Japan Pom Pom (2014) portrays a senior cheerleader squad, founded by Fumie Takino in 1996 with the aim of raising awareness about aging. In this project, Liverani searched for a non-stereotypical representation of the elderly.

She explained that she was fascinated by these senior cheerleaders, in that they challenge aging stereotypes while at the same time reinforcing gender stereotypes. In *Japan Pom Pom*, Liverani chose again the technique of portrait while also highlighting the subjects' stage persona and treating them as they were performing on stage.

Sugamo Beauty School (2018) is a photographic project about Sugamo, the so-called Harajuku of grannies, and a school of senior models. Liverani explained that she wanted to take street fashion shots, but she met with the resistance of elderly women and men who were especially self-conscious. She then found a beauty school in Sugamo where elderly amateur models are trained. She thus decided to take photos of those women wearing their own clothes and added photos of fashion items usually sold in Sugamo.

Women Sumo (2018) portrays amateur women sumo wrestlers. Women are not allowed to compete in professional sumo and are barred from the wrestling ring (dohyō). Liverani wanted to photograph women on the ring as a statement of women's right to stand on it and have access as a woman to a place that is usually exclusive to men. In her photos, Liverani portrayed the women's faces, but she also asked them to show her their favorite sumo techniques. One of the women portrayed in this project, Jyuri Beniya, was later invited to give a talk on her experience as a woman sumo wrestler at Liverani's exhibition Coexistences: Portraits of Today's Japan at the Japan Foundation, Sydney. As Liverani explained, this is an example of how documentary photography can go beyond taking a photo and representing someone by creating a space of exchange.

Lastly, Liverani introduced *Ainu Neno An Ainu*. Why there is so little known about the Ainu, the indigenous population of northern Japan, both outside and within Japan? How can we meet and engage with the Ainu people not only through museums and books but in real life? These are the questions at the beginning of the photographic project *Ainu Neno An Ainu* (2012-2016). In this project, Liverani kept her collaborative portrait approach. She asked the

subjects of her photos where they wanted to be photographed and what they wanted to wear: some chose their Ainu clothing, while others preferred their everyday cloth.

Liverani explained that while taking photos of the Ainu community she felt the need to expand this project and came up with the idea of making a documentary film to engage with the community, share their stories, and know more about the Ainu. She thus decided to team up with Neo Sora and Valy Thorsteindotti, respectively first director and producer of the film *Ainu Neno An Ainu* (2019). They chose the Hokkaido village of Nibutani as the place for their documentary because that is the place where Fosco Maraini, an Italian anthropologist who wrote extensively about the Ainu, had been. *Ainu Neno An Ainu* collects the stories of the Ainu people Liverani, Neo Sora and Thorsteindotti met in Nibutani. The narrator of the movie is Maya Sekine, who was 15 years old when she first met them.

Sekine, who in 2019 was invited to share an insider's perspective on her group identity at the above-mentioned exhibition *Coexistences: Portraits of Today's Japan*, also joined our event as a guest speaker. After a brief self-introduction in Ainu language, Sekine talked about her life as a young Ainu studying and working to raise awareness on her language and culture. Sekine also shared her impression of the encounter with Liverani and Neo Sora and the experience of being photographed and interviewed. She explained that as a child she used to resist the idea of being "used" as the subject of photography and interviews. However, Liverani and Neo Sora became part of her family and community. The photographic project *Ainu Neno An Ainui*, as well as the film, are thus not something created by an outsider but a record taken by the family for the family. Sekine explained that thanks to the encounter with Liverani and Neo Sora she came to understand the act of being photographed or filmed as a way to express herself as an Ainu.

Liverani's talk was followed by the screening of the film *Ainu Neno An Ainu* and the Q&A session, during which we had the chance to discuss the

struggle of preserving original languages and customs once banned by colonizing or majority power and the asymmetrical power relationships between the seer and the seen in photographs.